

日本基督教団 梅ヶ丘教会会報

ぶどうの木



第277号 2026年 8月号

発行人 牧師 広田叔弘
企画編集 広報委員会
www.church.ne.jp/umegaoka/
2026年7月26日発行

〒155-0033
東京都世田谷区代田 3-37-7
TEL : 03-3414-5772
FAX : 03-3414-5778



『神を愛し、隣人を愛す』

牧師 広田叔弘

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。コリントの信徒への手紙一 13章 4-7節

主日礼拝では、第一コリント書から主のメッセージを聴き続けました。最後の16章でパウロは次のように語っています。

主を愛さない者は、神から見捨てられるがいい。(16・22)

とても過激な言葉です。当時の礼拝では、典型的な文言としてこの言葉が語られていました。神に愛され、神を愛することを示すためです。パウロはこの表現を用いたわけです。続けて次のように語ります。

わたしの愛が、キリスト・イエスにおいてあなたがた一同と共にあるように。(16・24) コリント教会は混乱していました。信仰を巡って仲間争いがありました。豊かな人たちが貧しい人々をないがしろにしていました。福音を見失っていたのです。この教会に対して教えと戒めを与え続けます。そして最後に、神を愛することを語り、自らの教会に対する

愛を示して手紙を終えます。以上を考えると第一コリントの中心点は、神を愛し隣人を愛すること、ここにあると言えるでしょう。

主キリストによって私たちは、神の赦しを与えられています。私は私として、あなたはあなたとして、神さまの愛の中に受け入れられています。この愛を互いの間で生かし合うことをパウロは伝えているのだと思います。

冒頭に掲げた言葉は愛の内容を教えるものです。語られているところに異存はありません。しかし、ハードルの高さを感じます。情報過剰な時代です。目まぐるしく移り変わる現実の中で私たちは、目の前の出来事に対応するだけで精一杯。自分の心の声さえ聴くことは難しいのかもしれない。

けれども、述べられている愛の内容を棚に上げるとき、信仰は力を失います。福音は心の中にそつと置かれて動かない。人生に成長を与える力にはならない・・・。

パウロは愛を賜物として捉えています。「出来る、出来ない」ではなく、愛してみることにあります。そして愛は、必ずしも大きなことではありません。小さな思いやりにどれほど力をもたらすことでしょう。見返りを求めない愛が、隣人を生かし、私自身を生かしていきます。恵みの不思議が日常の中で起こります。